

研究ノート (学園研Cによる研究成果)

留学の成否と異文化適応力測定テスト (ICAPS)
構成因子との関係性

笠 原 正 秀

研究目的

本学部を志願する学生をひきつけるカリキュラムのひとつに、多彩な留学プログラムがあげられる (国際コミュニケーション学部 FD 委員会, 2007, 2008)。「海外ドイツ語演習 A」「海外フランス語演習」といった1か月の語学研修プログラム、また1か月から1か月半の小学校英語指導者資格取得を目的とした「海外英語演習 C」、夏休みや春休みの2か月を利用してドイツに語学留学する「海外ドイツ語演習 B」、また英語圏へ語学留学する「海外英語演習 A・B」、いわゆる中期ブリッジプログラム、そして、6-7か月、英語圏もしくはフランスに語学留学する中期留学プログラム、こうした多彩な留学プログラムをとおして、毎年、多くの学生たちを海外に送り出している (椋山女学園大学 2012 参照)。

2010 年度と 2011 年度の2か年にわたり、中期留学 (英語圏) プログラム (以下、中期留学と記す) と中期ブリッジ (英語圏) プログラム (以下、中期ブリッジと記す) から帰国した学生たちを対象に留学満足度調査を実施した結果、概して好評価ではあるものの、留学に関係する各側面の評価にはばらつきがあることもわかった (笠原, 2011 参照)。こうした留学の成否を決める大きな要因のひとつに、どれだけ異文化に適応でき、現地で生活できたか、という点があげられる。本研究は、そうした異文化適応に求められる心理的要因と、実際に学生が自分自身の留学に対して行った評価との関係性を明らかにしようとするものである。

研究方法

2010 年度と 2011 年度の2か年にわたり、中期留学 ($n=50$) と中期ブリッジ ($n=35$) から帰国した学生 ($N=87$) を対象に、留学に対する満足度調査を行った。留学満足度調査で使ったアンケートは、自身の英語力の変化に対する自己評価、カリキュラムの内容を含む語学学校に対する評価、現地での人間関係 (ホストファミリーや寮内、語学学校内、いっしょに留学をした椋山の学生を含む日本人間など)、各留学プログラムの事前および事後の指導などについて、選択および自由記述形式で回答してもらうものとなっている。自身の留学およびプログラム全体を包括的に概観するものといえる (笠原, 2011 参照)。

こうしたアンケートと同時に、デーヴィッド・マツモト氏 [David Matsumoto, Ph. D.] (サンフランシスコ州立大学、心理学部教授、異文化感情研究所所長) が異文化間の諸問題を社

会心理学の立場から研究し蓄積した膨大なデータから作成した「異文化適応力測定テスト [Intercultural Adjustment Potential Scale: ICAPS] 以下、ICAPS と記す」(マツモト, 1999) への回答も依頼した。しかし、留学満足度調査とは異なり、ICAPS へはできるだけ回答してもらえよう口頭では促したが、基本的には学生たちの自由意志の下に行われたものである。2 か年 で 2 枚 ではあるが無回答の用紙もあった。そのため、本研究での調査協力者数は $N=85$ となる。

回収に際しては、封筒に封入し、誰のものかまったく特定できない状態にして提出するよう指示した。回答に要した時間は、留学満足度調査と ICAPS の両方で 30 分程度であった。また、調査実施当日、何らかの予定を組んでしまい、その場で回答できない学生には、アンケート用紙を持ち帰らせ、後日、同様の形にして提出するよう、口頭で指示した。学生たちから寄せられた回答は統計的に処理され、ICAPS の合計および下位尺度と留学満足度との間にみられる関係性を探った。データ処理は、IBM SPSS 20 を用いて行った。

仮説

本研究での仮説として、中期ブリッジに参加した学生よりも、異文化での滞在期間のより長い中期留学に参加した学生の方が異文化適応能力が育っている、と想定される。つまり、ICAPS の合計および下位尺度の双方において、中期留学に参加した学生の方が異文化適応能力の成長がうかがえる数値になるはずである。また同時に、そうした学生の留学満足度も高い、と考えられる。両者間には、正の相関が示されるはずである。異文化適応能力の高い学生は、現地文化への適応も順調にいき、満足のいく留学生生活を過ごし、逆に異文化適応能力の低い学生は、現地文化への適応が順調にはいかず、留学生活に対して何らかの不満を持つ、と考えられる。

ICAPS を用いた先行研究

本調査の前段階として、ICAPS を用いた先行研究を概観している：明石 (2007, 2008) ; Ikeguchi (2007) ; Matsumoto, Hirayama, & LeRoux (2006) ; Matsumoto, & LeRoux (2003) ; Matsumoto, LeRoux, Bernhard, & Gray (2004) ; Matsumoto, LeRoux, Iwamoto, Choi, Roger, Tatani, & Uchida (2003) ; Matsumoto, LeRoux, Ratzlaff, Tatani, Uchida, Kim, et al. (2001) ; 武内・岡田・平山・マツモト (2005) ; Yoo, Matsumoto, & LeRoux (2006)。これらの研究論文を検証し、その有効性と信頼性の高さについて、文献上での確認を行っている。これらの内容については、笠原 (2007) を参照したい。

また、上述のような研究論文以外にも、研究発表抄録として、以下の 3 本にも目をおした：小森・武内・若山・岡田・マツモト (2002) ; 若山・武内・岡田・マツモト (2001) ; 若山・武内・岡田・橋本・中西・光本他 (2003)。これらの研究内容は、柔道や剣道といった海

外での国際試合に出場する選手らに ICAPS を回答してもらい、彼らの国際適応力をこれまでの海外経験の有無、地域、年齢、経験年数、段位等、さまざまな視点から検証したものである。また、若山・武内・岡田・橋本・中西・光本他（2003）は高校生を対象にした調査であり、この研究に関しては国際適応力ではなく、社会適応力の測定に ICAPS を用いている。

結果

ICAPS と留学満足度集計結果

本項では素点による合計および平均値のみについて言及し、中期ブリッジと中期留学のグループ間の差異についての統計的な分析は次項に譲る。また、ICAPS に関する言及や本データと比較対照に使われるデータはマツモト（1999）を用いている。その理由として、本研究では、正規版の ICAPS-55 ではなく、異文化適応に深く関わりとされる最重要四心理要素のみを抜粋した ICAPS-26 が使われているためである。ICAPS-55 では、データ処理も素点ではなく、各因子スコアと総合点を T-Score に標準化し、これまでの調査で収集してきた日本人準拠集団（T-Score： $M=50$, $SD=10$, $N=1271$ ；若山・武内・岡田・橋本・中西・光本他，2003 参照）と比較したものを使っているため、今回の調査結果と直接比較することはできないためである。

ICAPS 合計および下位尺度と留学満足度の集計結果は以下のとおりであった（表 1．参照）。留学の総合満足度は 10 段階評価尺度法で回答してもらい、その平均は $M=8.06$ ($SD=1.313$, $N=85$ ；中期ブリッジ： $M=7.89$, $SD=1.568$, $n=35$ ；中期留学： $M=8.18$, $SD=1.101$, $n=50$) であった。概して高い評価であることがわかる。また、中期留学に参加した学生の方が中期ブリッジに参加した学生よりもやや高い評価をしていることがわかる。本調査対象としているプログラムは学部独自に行っている留学プログラムではあるが、中期ブ

表 1. ICAPS と留学満足度（全対象者）

集計項目		留学の総合満足度	自尊心・自己受容（人格要素）	曖昧さや不確実性に対する忍耐力（感情規制要素）	クリティカルな考え方と創造性（クリティカル思考要素）	開示と柔軟性（オープンネス要素）	ICAPS 合計（最重要四心理要素のみ）
留学プログラム							
中期ブリッジ ($n=35$)	平均値	7.89	12.20	4.97	5.00	9.43	31.60
	標準偏差	1.568	7.161	4.787	4.602	3.090	10.958
中期留学 ($n=50$)	平均値	8.18	12.14	3.30	5.74	10.22	31.40
	標準偏差	1.101	6.462	5.285	6.194	3.877	10.713
合計 ($N=85$)	平均値	8.06	12.16	3.99	5.44	9.89	31.48
	標準偏差	1.313	6.717	5.123	5.575	3.576	10.750

リッジ (2 か月留学)、中期留学 (半年留学) ともに学生たちに十分満足してもらえていることがわかる。

次に、ICAPS を構成する最重要四心理要素の集計結果をみる。自尊心・自己受容 (人格要素) については、7 段階評価尺度法で回答してもらい、項目平均は $M=12.16$ ($SD=6.717$, $N=85$; 中期ブリッジ: $M=12.20$, $SD=7.161$, $n=35$; 中期留学: $M=12.14$, $SD=6.462$, $n=50$) であった。本要素は、数値が低いほど異文化におけるストレス処理がうまくでき、異文化への適応を成功に導くとされている (マツモト, 1999)。また、日本人の平均値として $M=10.8569$ という数値が示されており、日本人以外 (ほとんどがアメリカ人で人数は約 1300 人) の平均値は $M=6.2626$ であった。今回の調査で対象とした学生の数値は、マツモト (1999) が準拠集団としている日本人 (約 700 人) の結果と比較してもやや高いといえ、日本人以外の結果と比較するとかなり高い数値である。つまり、本調査の対象となった学生たちは、異文化におけるストレス処理をあまり上手にできるとはいえない、とみることができる。

曖昧さや不確実性に対する忍耐度 (感情規制要素) については、7 段階評価尺度法で回答してもらい、項目平均は $M=3.99$ ($SD=5.123$, $N=85$; 中期ブリッジ: $M=4.97$, $SD=4.787$, $n=35$; 中期留学: $M=3.30$, $SD=5.285$, $n=50$) であった。本要素は、数値が低いほど異文化での変化や想定外のできごとにも自力で適応していける、というものであり、創造性や革新性などとも関係があるとされている (マツモト, 1999)。日本人の平均値として $M=2.3176$ という数値が示されており、日本人以外の平均値は $M=1.3993$ であった (マツモト, 1999)。今回の調査で対象とした学生の数値は、マツモト (1999) が準拠集団とする日本人と比較しても高いといえ、日本人以外の結果と比較するとかなり高い数値である。したがって、本調査の対象となった学生たちは、異文化での変化や想定外のできごとに臨機応変に、かつ上手に対応できるとはいえない、とみることができる。

クリティカルな考え方と創造性 (クリティカル思考要素) については、7 段階評価尺度法で回答してもらい、項目平均は $M=5.44$ ($SD=5.575$, $N=85$; 中期ブリッジ: $M=5.00$, $SD=4.602$, $n=35$; 中期留学: $M=5.74$, $SD=6.194$, $n=50$) あった。本要素は、数値が高いほど、異文化におけるストレス処理がうまくでき、適応を成功に導くとされている (マツモト, 1999)。日本人の平均値として $M=5.0117$ という数値が示されており、日本人以外の平均値は $M=10.4471$ であった (マツモト, 1999)。今回の調査で対象とした学生の数値は、マツモト (1999) が準拠集団とする日本人と同程度とみることができる。しかし、日本人以外の結果と比較するとかなり低い数値である。つまり、本調査の対象となった学生たちは、異文化においてマツモト (1999) が準拠集団としている日本人と同程度のストレス処理はできるようであるが、日本人以外とは比較にならないくらい異文化でのストレス処理が上手ではないことがわかる。

開示と柔軟性 (オープンネス要素) については、7 段階評価尺度法で回答してもらい、項目平均は $M=9.89$ ($SD=3.576$, $N=85$; 中期ブリッジ: $M=9.43$, $SD=3.090$, $n=35$; 中

期留学： $M=10.22$, $SD=3.877$, $n=50$)であった。本要素は、数値が高いほど、異文化での幅広いさまざまな経験、独立した価値観、直観力、自己受容などに心を開いているとされている（マツモト，1999）。マツモト（1999）では、日本人の平均値として $M=9.0000$ という数値が示されており、また、日本人以外の平均値は $M=12.9448$ であった。今回の調査で対象とした学生の数値は、マツモト（1999）が準拠集団とする日本人と比較すると若干高いが、同程度とみることができる。一方、日本人以外の平均値と比較してみると、かなり低い数値である。つまり、マツモト（1999）が準拠集団とした日本人とは同程度のレベルで、異文化で遭遇するさまざまなものに対してオープンな姿勢がとれる、言い換えれば、その対応力と受容力がある、とみることができる。しかし、日本人以外の人々とは比較にならないくらいオープンな姿勢はとれていない、とみることができる。

最後に、ICAPS 合計は、上述の4項目を合計したものである（全対象者： $M=31.48$, $SD=10.750$ ；中期ブリッジ： $M=31.60$, $SD=10.958$ ；中期留学： $M=31.40$, $SD=10.713$ ）。ICAPS 合計は、点数が高いほど異文化適応を成功に導くとされている（マツモト，1999）。また、日本人の平均値として $M=47.0342$ 、日本人以外の平均値として $M=56.8173$ という数値が示されている。しかし、これらの数値は ICAPS-55（正規版）に含まれる15項目の心理要素の総合点であるため、本稿では直接の比較対照とはしない。

ICAPS と留学満足度集計結果に対する ANOVA

中期ブリッジ参加者と中期留学参加者との間にみられる差を検証するために、ICAPS 合

表2. ICAPS および留学満足度集計結果に対する ANOVA

			SS	df	MS	F	p
留学の総合満足度×留学プログラム	グループ間	(結合)	1.783	1	1.783	1.035	.312
	グループ内		142.923	83	1.722		
	合計		144.706	84			
自尊心・自己受容（人格要素）×留学プログラム	グループ間	(結合)	.074	1	.074	.002	.968
	グループ内		3789.620	83	45.658		
	合計		3789.694	84			
曖昧さや不確実性に対する忍耐度（感情規制要素）×留学プログラム	グループ間	(結合)	57.517	1	57.517	2.223	.140
	グループ内		2147.471	83	25.873		
	合計		2204.988	84			
クリティカルな考え方と創造性（クリティカル思考要素）×留学プログラム	グループ間	(結合)	11.274	1	11.274	.360	.550
	グループ内		2599.620	83	31.321		
	合計		2610.894	84			
開示と柔軟性（オープンネス要素）×留学プログラム	グループ間	(結合)	12.896	1	12.896	1.009	.318
	グループ内		1061.151	83	12.785		
	合計		1074.047	84			
ICAPS 合計（最重要四心理要素のみ）×留学プログラム	グループ間	(結合)	.824	1	.824	.007	.933
	グループ内		9706.400	83	116.945		
	合計		9707.224	84			

計および下位尺度と留学満足度の集計結果に ANOVA を実施したところ、以下のような結果が得られた (表 2. 参照)。

すべての項目において、プログラム間に有意な差は認められなかった：留学の総合満足度： $F(1, 83) = 1.035$, $p = .312$, $n.s.$, $\eta^2 = .012$ ；自尊心・自己受容 (人格要素)： $F(1, 83) = .002$, $p = .968$, $n.s.$, $\eta^2 = .000$ ；曖昧さや不確実性に対する忍耐度 (感情規制要素)： $F(1, 83) = 2.223$, $p = .140$, $n.s.$, $\eta^2 = .026$ ；クリティカルな考え方と創造性 (クリティカル思考要素)： $F(1, 83) = .360$, $p = .550$, $n.s.$, $\eta^2 = .004$ ；開示と柔軟性 (オープンネス要素)： $F(1, 83) = 1.009$, $p = .318$, $n.s.$, $\eta^2 = .012$ ；ICAPS 合計： $F(1, 83) = .007$, $p = .933$, $n.s.$, $\eta^2 = .000$ 。

こうした結果から、異文化に 2 か月の滞在をした学生と 6-7 か月の滞在をした学生との間に、異文化適応に深く関わりとされる最重要四心理要素：自尊心・自己受容 (人格要素)、曖昧さや不確実性に対する忍耐度 (感情規制要素)、クリティカルな考え方と創造性 (クリティカル思考要素)、開示と柔軟性 (オープンネス要素) に差が生じることはなかった。

仮説として、異文化での滞在期間が長ければ長いほど、異文化適応に影響があるとされる心理的要素は育まれるはず、と考えた。つまり、滞在期間が 2 か月の中期ブリッジより 6-7 か月の時間を異文化の中で過ごしてきている中期留学の学生の方が、こうした心理的要素が育まれているはずである。しかし、今回、そうした結果にならなかったのは、異文化に突入し、ある一定期間の時間を過ごすことで、期間の長短に関係なく、こうした異文化適応に求められる心理要素が同様に育まれた、と解釈することも可能である。しかし逆に、そうした異文化適応力を育むには、2 か月や 6-7 か月という時間では不十分であり、目にみえる変化は生まれない、と解釈することも可能である。この点については、異文化滞在経験のない集団と比較対照することにより検証したいと考える。

別視点からは、調査対象者数が十分ではなかった、あるいは ICAPS-26 (マツモト, 1999) では、その精度が不十分で、ICAPS-55 (正規版) を使用した場合、別の結果が得られたかもしれない等、今後の検討課題としたい。

次の表 3. は ICAPS 合計、下位尺度、留学満足度と留学プログラム間の連関の測定結果 (効果量) を示したものである。 η^2 は「全体における、ある要因の占める割合 (分散説明率) が計算されている」(武本・竹内, 2008, p. 61) ものである。ANOVA では、 η^2 を使うのが通例である。

表 3. 調査項目と留学プログラム間の連関の測定 (効果量)

	η	η^2
総合満足度×留学プログラム	.111	.012
自尊心・自己受容 (人格要素)×留学プログラム	.004	.000
曖昧さや不確実性に対する忍耐度 (感情規制要素)×留学プログラム	.162	.026
クリティカルな考え方と創造性 (クリティカル思考要素)×留学プログラム	.066	.004
開示と柔軟性 (オープンネス要素)×留学プログラム	.110	.012
ICAPS 合計 (最重要四心理要素のみ)×留学プログラム	.009	.000

Cohen の研究、Field の研究、Tabachnick and Fidell の研究（武本・竹内，2008 に引用）をもとに、武本・竹内（2008）が作成した一覧表（p. 62）を参照すると（ $\eta^2 > .14$ で効果量は、大、 $\eta^2 > .06$ で効果量は中、 $\eta^2 > .01$ で効果量は小）、すべての項目にわたり効果量は小と判断される。

ICAPS 合計および主要心理要素間と留学満足度との相関

ICAPS 合計および ICAPS を構成する最重要四心理要素間と留学満足度との間の相関係数（ r ）は以下のとおりであった（表 4、参照）。本項では、二者間のピアソン積率相関係数を用いて検証している。

表 4. ICAPS 合計および下位尺度間と留学の総合満足度との相関係数

	(N=85)	1	2	3	4	5	6
1. 総合満足度		—	-.343**	-.023	.000	.067	-.203
2. 自尊心・自己受容（人格要素）			—	.063	.009	-.132	.616**
3. 曖昧さや不確実性に対する忍耐度 （感情規制要素）				—	-.166	-.175	.372**
4. クリティカルな考え方と創造性 （クリティカル思考要素）					—	.441**	.591**
5. 開示と柔軟性（オープンネス要素）						—	.396**
6. ICAPS 合計（最重要四心理要素のみ）							—

**：相関係数は 1 % 水準で有意（両側）

ICAPS 合計と ICAPS を構成する下位尺度との間には、すべての項目において有意な正の相関関係が認められた（自尊心・自己受容〈人格要素〉： $r = .616$, $p < .01$ ；曖昧さや不確実性に対する忍耐度〈感情規制要素〉： $r = .372$, $p < .01$ ；クリティカルな考え方と創造性〈クリティカル思考要素〉： $r = .591$, $p < .01$ ；開示と柔軟性〈オープンネス要素〉： $r = .396$, $p < .01$ ）。ICAPS 合計と自尊心・自己受容（人格要素）、そしてクリティカルな考え方と創造性（クリティカル思考要素）の各項目間には、かなり強い正の相関がみられた。また、ICAPS 合計と曖昧さや不確実性に対する忍耐度（感情規制）、開示と柔軟性（オープンネス要素）とは弱い正の相関が認められた。

そして、本研究の主旨でもある、留学満足度と有意な相関を示したのは自尊心・自己受容（人格要素）の項目であった（ $r = -.343$, $p < .01$ ）。数値的には弱い負の相関といえる。つまり、自尊心・自己受容（人格要素）の項目の点数が高いほど留学満足度が低く、自尊心・自己受容（人格要素）の項目の点数が低いほど留学満足度が高い、ということである。自尊心・自己受容（人格要素）の項目は、前項で触れたように、数値が低いほど、異文化におけるストレス処理がうまくでき、異文化への適応を成功に導くとされているものである（マツモト，1999）。このことから、異文化におけるストレス処理がうまくできる学生ほど、異文化への適応がスムーズに行われ、結果、満足度の高い留学生活を送ることができる、といえ

る。

本稿は、研究ノートとして、調査結果の提示と分析を行うにとどめているが、現在、論文の執筆も同時進行で進めている。論文は2012年度に帰国する学生のデータも新たに加え、再検討したものを発表したいと考えている。本研究の成果は、今後、学生たちが留学に出発する際、どのような心理的素養を事前に育んだらよいのか、その心構えの指導や事前に異文化適応に困難が生じる可能性のうかがえる学生を発見する上で有効に活用できるものと考ええる。また、学生のみならず、異文化適応を求められるような状況に臨むすべての人々に利用・応用できるような成果を示したいと考える。

引用文献

- 明石聡子 (2007) 大学生の情動制御と精神的健康の関連：情動制御尺度（国際適応力尺度の下位尺度）の有効性について『人間文化創成科学論業』10, 309-317.
- 明石聡子 (2008) 精神的健康の関連要因としての情動制御とパーソナリティ：情動制御尺度（国際適応力尺度の下位尺度）の有効性について II『人間文化創成科学論業』11, 413-419.
- Ikeguchi, C. (2007). Intercultural Adjustment — Reconsidering the issues: The case of foreigners in Japan. *Intercultural Communication Studies*: XVI. 99-109.
- 笠原正秀 (2007) 異文化適応力診断テスト (ICAPS) の再検討とその有効性 平成18年度 学園研究費助成金(B)研究成果報告 (相山女学園大学)
- 笠原正秀 (2011) 2010年度中期ブリッジ・中期留学アンケート調査結果『2010年度相山女学園大学学園研究費(C)「海外留学事前事後指導の基礎研究」研究報告書』(pp. 1-41)
- 国際コミュニケーション学部FD委員会 (2007) 『第4回国際コミュニケーション学部自己点検 (2006年度) 報告書』
- 国際コミュニケーション学部FD委員会 (2008) 『第5回国際コミュニケーション学部自己点検 (2007年度) 報告書』
- 小森富士登・武内政幸・若山英央・岡田龍司・マツモト, D. (2002) 大学剣道選手の国際適応力一年齢、経験年数、学年、段位の比較—『日本体育学会大会号』(53), 533.
- マツモト, D. (1999) 『日本人の国際適応力』本の友社
- Matsumoto, D., Hirayama, S., & LeRoux, J. A. (2006). Psychological skills related to intercultural adjustment. In P. Wong, L. Wong, & W. Lonner (Eds.), *Handbook of Multicultural Perspectives on Stress and Coping* (pp. 387-405). Spring Street, NY: Springer.
- Matsumoto, D. & LeRoux, J. A. (2003). Measuring the psychological engine of intercultural adjustment: the Intercultural Adjustment Potential Scale (ICAPS). *Journal of Intercultural Communication* (6), 37-52.
- Matsumoto, D., LeRoux, J. A., Bernhard, R., & Gray, H. (2004). Unraveling the psychological correlates of intercultural adjustment potential. *International Journal of Intercultural Relations*, 28, 281-309.
- Matsumoto, D., LeRoux, J. A., Iwamoto, M., Choi, J. W., Roger, D., Tatani, H., & Uchida, H. (2003). The robustness of the intercultural adjustment potential scale (ICAPS): the search for a universal psychological engine of adjustment. *International Journal of Intercultural Relations*, 27, 543-562.
- Matsumoto, D., LeRoux, J. A., Ratzlaff, C., Tatani, H., Uchida, H., Kim, C., et al. (2001). Development and validation of a measure of intercultural adjustment potential in Japanese sojourners: the Intercultural

- ral Adjustment Potential Scale (ICAPS). *International Journal of Intercultural Relations*, 25, 483-510.
- 相山女学園大学 2012 [大学パンフレット] 国際コミュニケーション学部
- 武内政幸・岡田龍司・平山聡子・マツモト, D. (2005) 柔道の理想と現実の一考察—高校生柔道選手と大学生柔道選手の ICAPS の比較より—『大東文化大学紀要』社会科学・自然科学 43, 67-80.
- 水本篤, 竹内理 (2008) 研究論文における効果量の報告のために—基礎的概念と注意点—『英語教育研究』31, 57-66
- 若山英央・武内政幸・岡田龍司・橋本敏明・中西英敏・光本健二他 (2003) 『日本体育学会大会号』(54), 538.
- 若山英央・武内政幸・岡田龍司・マツモト, D. (2001) 大学柔道選手の国際適応力—地区別大学間と海外経験有無の比較—『日本体育学会大会号』(52), 478.
- Yoo, S., H., Matsumoto, D., & LeRoux, J. A. (2006). The influence of emotion recognition and emotion regulation on intercultural adjustment. *International Journal of Intercultural Relations*, 30, 345-363.